19 世紀ベルリンの博物館建築における装飾の利用について

―――フリードリヒ・シンケルからマルティン・グロピウスまで――

三井　麻央[※1]

概要　本研究は、19世紀ベルリンの建築家らによる「装飾」とはいかなるものであったか解明することを目的とする。とりわけ、博物館建築がその理念を示す「窓」として装飾を盛んに用いた例に顕著にうかがえるような、カール・フリードリヒ・シンケル（1781-1841）やマルティン・グロピウス（1824-80）の時代に生じた、19世紀の新たな装飾観に着目する。また、シンケル以来の装飾の利用および工芸運動の活発化とグロピウス設計によるベルリン工芸博物館の成立という実際の運動や作品の考察を軸に研究を進める。

研究背景と目的

背景1: 「窓」としての博物館装飾

19世紀の展示空間は多くの壁画やレリーフで覆われ、それらが異なる時代や国のイメージをもたらすことで展示物の歴史的文脈を補い、人々に伝達してきた。つまり19世紀の博物館では建築装飾が異世界に臨む「窓」の役割を担っていたのだ。「窓」としての建築装飾は、展示物を文脈から引き離すホワイト・キューブの理念と正反対のものである。これら19世紀の博物館装飾はいかなる思想にもとづき形成されたのか。また、これらは20世紀になると完全に失われたのか。この問題について申請者は、19世紀ベルリンにおける博物館の装飾壁画に関する研究を通して、これまで考察を進めてきた。

背景2: 建築家の装飾や工芸に対する関心

19世紀の博物館における建築装飾の利用は、当時の建築家らの装飾や工芸への関心と密接に結びついている。ドイツ語圏でもこの傾向は顕著で、例えば新古典主義の建築家カール・フリードリヒ・シンケルは博物館装飾のほかパノラマや室内装飾の仕事を通じて理想都市のヴィジョンを示し続けた。続けてシンケル以後の建築家らも、さまざまな時代・地域の装飾や工芸を積極的に自らの作品へ活用する。これら装飾への関心は20世紀のドイツ工作連盟、バウハウス、あるいはアルベルト・シュペーアの都市計画にも連なる一つの契機であった。本研究が主な対象とするベルリン工芸博物館（マルティン・グロピウスら設計、1877-81）の建築と装飾もまた、これら建築家の装飾への関心の一つの結実とみなすことができる。

研究の目的

本研究は、シンケル、シュテューラーの時代からグロピウスの工芸博物館建設に至るまでのベルリンを対象に、19 世紀の建築空間で装飾が担った意義とその展開について、具体的事例を通じて明らかにすることを目的とする。装飾を用いる展示手法とは、展示物を元あった時代・場所から、新たに作られた歴史的文脈へと再配置する、19 世紀に本格化した極めて近代的かつ西洋的な価値観に基づくものである。ゆえに当時の装飾観を解明することは、それによっていかに歴史を構築するかという西洋の歴史観、物質観という、より広い問題の理解にもつながる。このことは、ホワイト・キューブさえも自明のものでなくなった 21 世紀の展示空間を考察する上でも省みられるべき、アクチュアルな課題である。

※1 京都芸術大学等非常勤講師

研究成果と考察

成果 1: 18 世紀と 19 世紀の装飾論

シンケルをはじめとする 19 世紀の建築家は古代ギリシャ、ローマの様式を用いる新古典主義の建築家として知られるが、その古代への関心は 18 世紀の美術史家ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンの『ギリシャ芸術模倣論』(1755) などに遡るといわれる。

確かにヴィンケルマンの古代観は 19 世紀の芸術家に大きな影響を与えたが、装飾に対する見解に限って着目してみると、18 世紀のヴィンケルマンと 19 世紀のシンケルらとでは異なる美的感覚や古代観がみえてくる。つまり、装飾に対する肯定的な関心は 19 世紀になってから生じたものであり、18 世紀には未だ忌避されるべきものだったのである。そのため、本研究はまずヴィンケルマンの装飾論の考察に着手した。

ヴィンケルマンは『ギリシャ芸術模倣論』においてもすでに、ウィトルウィウスを援用しながらグロテスク模様や、バロック・ロココ時代の装飾を否定している（文献リスト 16, S. 43)。また、ヴィンケルマンの建築論である 1762 年の『古代の建築芸術についての注釈』（リスト 17）は第 2 部に建築装飾に関する独立した章を含むが、ここでは具体的な建築の名を挙げながら、建造物の各部位について特徴的な装飾が紹介される。そのときヴィンケルマンの論に特徴的なこととして読み取れるのは、建築にとっての構造や素材、形態が「本質的なもの（Wesentliche)」と呼び表されるのに対して、装飾は「小さいもの・些細なもの」を示す"Zierlichkeit"という語で表され、加えて「身体」に対する「衣服」、「単純さ・単一性」に対する「多様性」、「本質」に対する「見かけ」といった表現で、二項対立的に装飾の劣位が強調されることであった。

実際には、ヴィンケルマンが賞賛し模倣することを薦めた古典古代の建築にも彩色がなされていたことをヴィンケルマン自身も知っていた。18 世紀後半から 19 世紀にかけて盛んになる、ギリシャやローマなど古代建築の彩色、つまりポリクロミーについて実測調査を行った建築家の仕事は、シンケルらに直接的な影響を与えることとなる。

成果 2: シンケルによる装飾の利用

シンケルはギリシャに直接赴くことはなかったが、建築家のゴットフリート・ゼンパー (1803-79) はギリシャでの実測の内容をシンケルに報告したので、シンケルはそれらの資料を目にしていたはずである。ゼンパーらを中心とする、ポリクロミーがかつて古典古代の建築の表面全体を覆っていたという見方は、ゼンパーの『建築芸術の四要素』(1851) などで具体的に示されるが、ゼンパーはその著書の中で、同時代の建築には古代のポリクロミーを使用することはできないとしている（リスト 12、河田訳 10-11 頁)。

一方ベルリンでは、他の都市よりも多くポリクロミーが同時代の建築に用いられたといわれる。本研究では 9〜10 月にかけてベルリンとポツダムで調査を実施し、シンケルによる多彩色建築の仕事を観察することができた。まずベルリンではシャルロッテンブルク城に隣接するパヴィリオン、そしてポツダムでは、サンスーシ宮殿敷地内にあるシャルロッテンホーフおよび「宮廷庭師の家」と呼ばれる施設を見学した。いずれも当時のプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム 3 世、4 世のためにシンケルが内装も含め設計した施設であるが、主に玄関部分および建築の内部が鮮やかに彩られている。とくにポツダムの 2 作では、黒、赤地を基調とするポンペイ風の彩色やモザイクによる動物の描写などが明確に古典古代的な趣味をうかがわせており、ポリクロミーの実践例であるといえる。

これらは単に国王の指示による単発的な仕事というだけでなく、これらの例以外にもシンケルの代表作である旧博物館にもかつてファサードには壁画が設置されていたし、ポリクロミーの用いられた建築物が最近も発見された（リスト 9)。また、シンケルは国王のためにデザインした家具や建築物のための装飾をカタログ化し、手工業者が利用可能になるよう出版している（リスト 15)。このことは、シンケルがプロイセン王国の官僚として産業の発展、生産品の質向上に努めた実践の一部として解釈できる。シンケルの弟子である建築家のフリードリヒ・アウグスト・シュテューラー（1800-65）も家具のデザイン集の出版（リ

スト 14)、ポンペイの室内装飾に関する論文の執筆（リスト 13)、そして例えばベルリンの新博物館などにおいて、シンケル以上に彩色建築を実践的に利用した。

成果 3: グロピウスらによる装飾の利用

シュテューラーと同様、シンケルに後続する「ベルリン派」と呼ばれる 19 世紀の建築家らのうち、マルティン・グロピウス（バウハウスの創設者ヴァルター・グロピウスの大叔父にあたる）もまた、装飾に用いられる技術を工芸（Kunstgewerbe）として地位向上させることに努めた人物であった。これには、19 世紀半ばのロンドン万博を機に、ドイツの工芸運動もまた、さらに組織的な拡大が求められるようになったこととともかかわる。1877 年から 81 年にかけてベルリンに建設された工芸博物館は、その組織自体は工芸学校とともにすでに存在していたが、独立した建築をもつことによって工芸は博物館での展示に足るものとして権威づけられ、展示室や建築の並びによって歴史化の対象となる。

この工芸博物館の建築を設計したのが、グロピウスとハイノ・シュミーデン（1835-1913）であった。工芸博物館で随所に用いられた装飾は、当時の工芸がいかに権威づけられたかを解明できる手がかりになると見立て、本研究では上述のベルリン調査の際に工芸博物館（現在はマルティン・グロピウス・バウという呼称で美術館として用いられる）を訪れた。そこで研究書には掲載されていなかった装飾の細部を確認するとともに、開館当時に出版された記念刊行物（リスト 8）を読解することで、工芸博物館の建築装飾がいかに工芸芸術を表象しているのかを考察した。

例えば、建築のファサード上部に設置された多彩色のモザイク画には古今東西の工芸芸術の擬人像が示され、その下部に設置された 66 枚の銘板には歴史上工芸や装飾芸術の分野で活躍した芸術家の名前が記されている。博物館建築を飾る銘板に歴史上名の残る芸術家の名前が刻印される例は多数存在するが、その内容をつぶさに検討すると、工芸博物館の場合必ずしも①著名といえる芸術家ばかりが記されているわけではないこと、さらに②ドイツの芸術家ばかりではないことが明らかになる。①に関しては、歴史上に名の残る大芸術に携わったオールド・マスター以外の工芸芸術家および職人をも救い出し、権威づける試みがうかがえる。人物選択のために何かしらの工芸史のテクスト（事典、伝記集等）が参照されたのかについては今後調査を進めたい。一方②に関しては、ファサード上部の擬人像と同様、工芸芸術の国際性・普遍性を強調しようとする意図を看取できる。館内中央部の「光の中庭」に設置されたレリーフにも、古今東西の工芸芸術を代表する人物・品物が祝祭行列をなす様子が描かれている。ただし館内のレリーフにおいては、ドイツ・ルネサンスをその行列の重要な部分に据えることによって、工芸芸術の中心地がドイツであることが強調されている。先述の記念刊行物でも、工芸の歴史が「祖国」に繁栄をもたらすことが示されている。このことは、政府側に工芸の重要性を知らしめる役割も果たしていたとみられる。

考察・今後の展望

このように本調査研究は、19 世紀のベルリンにおける装飾観の形成を、①前提となる 18 世紀の装飾忌避、②シンケルによる彩色建築の実践と装飾・美的な工芸製品の実用化・普及の試み、③シンケル以降の建築家と工芸博物館の建設による装飾・工芸の権威化といった 3 段階に分けて明らかにすることができた。

このことは、19 世紀に実測調査が進んだことで歴史主義的関心が高まり古代観が変化したこと、またプロイセン・ドイツが帝国主義的な権力を高めていくために産業面でも発展する必要があったことなどの外的要因が考えられる。

このような試みはロンドン、ウィーンなどの都市でも発生したが、ベルリンは産業的により進歩していたロンドンよりも早く実践が行われたようにみえる。このことを立証するため、今後はロンドンの建築装飾、工芸に関する調査も必要だと考えている。

また、シンケルは古典主義だけでなくゴシックなど、多様な様式から選択をし建築に適用する多面性を持っていた。シンケルの様式選択や建築論の分析も今後の課題としたい。

<u>主要参考文献</u>

(1) Börsch-Supan, Eva: *Berliner Baukunst nach Schinkel 1840-1870*, München: Prestel-Verlag, 1977.
(2) Börsch-Supan, Eva et.al: *Karl Friedrich Schinkel – Lebenswerk: Arbeiten für König Friedrich Wilhelm III. von Preußen und Kronprinz Friedrich Wilhelm (IV),* Berlin, München: Deutscher Kunstverlag, 2011.
(3) Bleek, Jennifer: *Fassade und Ornament*, *Formgenealogien in der Gegenwartsarchitektur*, Paderborn: Brill Fink, 2022.
(4) Gleiter, Jörg H.: *Architekturtheorie zur Einführung*, Hamburg: Junius Verlag, 2022.
(5) Gropius, Martin (Hrsg.): *Carl Friedrich Schinkel – Dekoration innerer Räume*, Berlin: Verlag Ernst & Sohn, 1874.
(6) Kampmann, Winnetou/ Weström, Ute (Hrsg.): *Martin-Gropius-Bau. Die Geschichte seiner Wiederstellung*, München, London, New York: Prestel, 1999.
(7) Körte, Arnord: *Martin Gropius: Leben und Werk eines Berliner Architekten 1824-1880*, Berlin: Lukas Verlag, 2013.
(8) Kunstgewerbemuseum zu Berlin (Hrsg.): *Das Kunstgewerbe-Museum zu Berlin: Festschrift zur Eröffnung des Museumsgebäudes*, Reprint mit einem Nachwort von Manfred Klinkott, Berlin: Frölich & Kaufmann, 1881.
(9) Meincke, Joachim/ Pischetsrieder, Florian (Hrsg.): *200 Jahre Gelehrterheim 1821-2021, Nachspiel der Gedanken aus Schönhausen Sommerstunden*, Berlin: Europrint, 2021.
(10) Mundt, Barbara: *Museumsalltag vom Kaiserreich bis zur Demokratie. Chronik des Berliner Kunstgewerbemuseum*s, Köln, Weimar, Wien: Böhlau, 2018.
(11) Schulze Altcappenberg, Hein-Th. et.al.: *Karl Friedrich Schinkel: Geschichte und Poesie*, München: Hirmer Verlag, 2012.
(12) Semper, Gottfried: *Vorläufige Bemerkungen über bemalte Architektur und Plastik bei den Alten*, Altona, 1834.
――*Die vier Elemente der Baukunst: Ein Beitrag zur vergleichenden Baukunde*, Braunschweig: Vieweg und Sohn, 1851.
（ゴットフリート・ゼムパー「建築芸術の四要素―比較建築学への寄与―」『ゼムパーからフィードラーへ』河田智成編訳、中央公論美術出版、2016 年、5-139 頁）
(13) Stüler, August: Ueber Dekorazion der Zimmer zu Pompeji, in: *Allgemeine Bauzeitung*, 5, 1840, S. 226-233.
(14) Stüler, August/ Strack, Heinrich: *Vorlege-Blätter für Möbel-Tischler*, Potsdam: Verlag von Ferdinand Riegel, 1846.
(15) Techinische Deputation für Gewerbe (Hrsg.): *Vorbilder für Fabrikanten und Handwerker*, 3Bd., 1821-37.
(16) Winckelmann, Johann Joachim: *Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke in der Malerey und Bildhauerkunst*, Dresden/Leipzig, 1756.
（ヴィンケルマン『ギリシア芸術模倣論』田邊玲子訳、岩波書店、2022 年）
(17) Winkelmann, Johann Joachim: *Anmerkungen über die Baukunst der Alten*, Leipzig: Johann Gottfried Dyck, 1762.